

CO・OP

京都の生協

2022/August/No. 106
京都府生活協同組合連合会



「人間科学」から平和を考える

TalkTalk トークとーく

●立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授 村本邦子さん
●京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向

対談

TalkTalk
トークとーく

「人間科学」から平和を考える

立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授 西村邦子さん
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向



ロシアによるウクライナ侵攻により、メディアからは日々多くの女性や子どもも含め、民間人がたいへんな被害を受けていることが報道されています。阪神淡路大震災で注目された心のケアなど、「一人ひとりの『心』の問題と関わっている」にも、

人間科学研究とは

西島 まず先生の研究テーマである、人間科学研究について教えてください。
村本 人間科学研究とは、ひとこと言ってしまうと、人間を科学しようというものです。自然科学は物をバラバラにして分析しますが、人間をバラバラにして分析しても人間を理解することはできない。統合的な観点から人間を考えていく必要がある。私自身は必ずしも人間科学をやると思ってたわけではなく、たまたま自分のいるところが人間科学研究科という名称になったということなんです。とは言え、中学の時に心理学を学ぼうと思っ、その理由は人間というものに興味があり、人間についてもっと知りたいと思ったからなので、人間科学を志したというのも間違いではないかもしれません。



立命館大学大学院応用人間科学研究科 教授 村本邦子さん

差別も受けた。そんなことがあって私に「あなたは世の中の弱者の味方になりなさい」と言われて育ちました。
そんな母の影響を受け、私は小学校でも中学校でも、クラスでいじめがあったらとにかく割って入るような子どもでした。中学生になっていじめられている男の子を助けると、思春期ですから、ハートマークを書かれたりしました。いじめられる人、いじめられる人を見ていると、そこには関係の悪循環があり、どうにかしてそんな悪循環を断ち切ることはできないのだろうかとか考えていました。
ええ、それからもう一つ、小さい頃、夜こわい夢を見る小ごがりました。後で思うと母から聞かされた空襲の記憶だったのかもしれない。あるとき、寝る前に「こわい夢を見るかもしれない」と思っていました。絶対に見ないことに気づきました。こわい夢の存在をすっかり忘れていたと、ふっとこわい夢がやってくるのです。その頃、政府の広報で「災害は忘れた頃にやってくる」というCMをやっていた。私は「こわい夢は忘れた頃にやってくる」というポスターを作っていました。

個々人の心の問題に、時代や社会の影響が

西島 それで京都大学に進学されたんですね。
村本 河合先生がいらつしやる京都大学の教育学部に入りました。大学時代は本をたくさん読み、好きなだけ勉強し、自山で楽しかったのですが、大学院に入るとどうにも世界が狭くて窮屈で、修士を終えると、精神科のクリニックで非常勤として働きはじめました。子ども、思春期、大人、たくさんの人たちと会いました。心理学では一人ひとりの心の問題と捉えがちですが、時代を共有するたくさんの方のケースをいっぺんに見ると、個々人の背景にある社会や時代の影響があるということに気づいていきました。
その頃は、「登校拒否」が話題になっていたのでですが

「不登校」という言葉はまだなく、物があふれすぎて、何でも与えられて育ち、自分の欲求がわからなくなっている子が多いのではないかと思いました。お腹が空いて食べるから、「おいしい」と感じるけれど、お腹が空いていないのに次々と食べ物を出されると食欲は湧かない。私たちの親の世代は戦後のモノがない時代を経験して、子どもに對する愛情の証を物質に求めました。白いご飯、新しい文房具。戦後の日本社会の復興を物質でやってきたことのツケが心の問題として表れてきたのではないかと。



C/O/N/T/E/N/T/S

トークとーく対談 「人間科学」から平和を考える	2	支援機構関西(KC's)通常総会・記念シンポジウム	9	学習会「プラスチック資源循環促進法と京都府プラスチック削減実行計画」開催	13		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	総会だより	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	京都労働者福祉協議会第66回定期総会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	京都食育ネットワーク総会・情報交換会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	京都食品産業協会令和4年度定時総会・研修会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	京都府災害ボランティアセンター総会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	NPO法人京都地球温暖化防止府民会議 2022年度通常総会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	京と地球(アース)の共生府民会議総会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	認定NPO法人気候ネットワーク総会	14		
京都府生活協同組合連合会 会長理事 西島秀向	7	きょうと食の安心・安全フォーラム	8	学習会「防災・BCP(事業継続計画)の基礎を学ぶ」開催	12	おもな行事のお知らせ	14

女性ライフサイクル研究所の活動から、新たな学びへ

村本 その頃、結婚して子どもを2人産んで、子育て仲間ができました。当時は子育て支援なんか必要ないと言われていたのですよ。昔のお母さんたちはたくさんのお母さんたちを育てたけど、家事も全部電化でラクになり、子どもも少ないのに、なんの支援があるの？というわけです。でも実際はみんな悩んでいた。良いお母さんになりたいという思いにとらわれすぎて、外から見るとおしゃやれで元気に見えるお母さんたちが、無理を重ね、そのしわ寄せが暴言や暴力の形



で子どもにいつていたのです。これは「予防臨床心理」が必要だ、と思いました。問題が噴出してから臨床するより、子育て中のお母さんを支援すること、予防できることがあると。それで自宅に仲間を集めて一緒に語り合う会や、勉強会を始めました。これが面白くなって、仕事としてやろうとワンルームを借りたのが「女性ライフサイクル研究所」のはじまりで、1990年のことでした。最初の1年でスタッフが5人になりました。

90年代は女性問題が追い風で、あちこちに女性センターができて、「女性と仕事」「母親神話」のような話や講演活動などをスタッフと手分けしてやっていました。カウンセリングやグループを通じて、女性の悩みや思いを共有していたのですが、虐待や性暴力、DVといった問題が見えてきました。でも、当時、そういった概念は日本にはまだなくて、アメリカからの情報を得ながらどう支援できるのか試行錯誤していました。

1995年の阪神淡路大震災からPTSDや「心のケア」が言われるようになり、90年代後半になると、日本でも、海外からゲストを呼んでトラウマ関連のシンポジウムや講

※「女性ライフサイクル研究所」
https://www.f-lifecycle.com/about/
臨床心理士による女性たちのためのカウンセリングの場（大阪）。1990年10月、「社会にひらかれた心理臨床」を志して女性ライフサイクル研究所が設立されました。設立以来、女性と子どもの視点にたつ個人臨床からコミュニケーション支援まで取り組んできました。研究所では、女性や子どもが安全に、尊厳をもって生きていける社会を目指して貢献します。（HPより抜粋）

村本 留学しなかったのですが、子どもはまだ小さいし、どうしようか悩んでいたら、アメリカのユニオン・インスティテュートという、distance learning（ディスタンスラーニング）をやっている大学院を知りました。基本的に日本で勉強しながら、アメリカに行ったり来たりするのです。そこで素晴らしい教育を受け、博士論文を書いてPh.D. (Doctor of Philosophy 博士号) を取りました。学習者中心主義、学

立命館大学での東日本家族応援プロジェクト

村本 ユニオン・インスティテュートを卒業した2001年に、たまたま立命館大学の

トし、教えるようになりました。自分が受けた教育を日本でも

代々の驚くべき智慧がたくさんありました。民話やお祭りと死者と交流するチャネルなど。たとえば、ふたつの異なる世界が交わり合う境界領域は汽水域と呼ばれますが、青森のイタコや口寄せなど、東北には生者と死者が出会い対話できる空間があります。岩手県に「風の電話」という死者と話せる電話ボックスがあつて有名になりましたが、土地の文化にフィットしたう



行って「助けてあげます」ではなく、その場所を受け入れていただく、人々がどんなふうに苦難を生き抜いているのか、土着の知に学ばせてもらうという姿勢で入りました。西島 東日本大震災では生協からも各地へ支援に行ったりするのですが、参加した人は、「支援と想っていたけれど、逆に心を癒される」と言っていました。

実現できたらと思いました。立命館でやった大きな仕事のひとつは、「東日本・家族応援プロジェクト」だと思います。阪神淡路大震災のとき、1週間後に神戸に入り、毎週ボランティアに通いましたが半年で仕事を終えると、その後は関わりなくなりました。あの時、災害の現場でカウンセリングの形でボランティアは現場にフィットしないことを学びました。避難所でも子ども達と遊ぶ大学生中心のボランティアのなかに入ったのが一番よかったのです。子育て支援やDVシェルターでの親子支援も、悩みを聞くというより、一緒に何かする必要がある事案が出てくれば対応するというのが一番効果的でした。

に來られていた方に、「私がこんなふう生きていたことを先生だけは忘れないで知っていて欲しい」と言われたことがあります。誰一人自分のことを知らないということほどむごいことがあるでしょうか。たった一人でも自分のことを理解しようとしてくれる人がいるということは力になります。専門家にできることははしれているけれども、それならできると思いました。ウィットネス（目撃者）ですね。こうして被災と復興の証人になることを目指し、東北4県、各地域で楽しいプログラムを一緒にやって交流しながら10年、コロナがあつて結局11年続けました。



西島 いまロシアがウクライナに侵攻して、たくさんの方が亡くなられ、女性や子どもが被害を受けていますが、何か思われることはありますか？

村本 長く虐待、DV、性暴力などの問題に関わってきましたが、家族の間の背後に日本社会の「戦争の影」のようなものを感じてきました。戦地で非人間的な経験を重ねた男性たちは、国に戻り、結婚し、子どもが生まれても家族との親密な関係、やわらかな触れ合いはできなかつた

のではないか。その歪みが悪い形では出ると家庭内での暴力になる。別の形は、家族に情緒的に近づかないようにする。被害も加害も含め、自分の過去に目を向けないように死ぬまでがむしゃらに働き続けようとした男性たちが焼野原になった日本の戦後の経済復興を支



ロシアのウクライナ侵攻について、戦争の影



えた。加害兵の証言のなか
 「自分の子どもが産まれたと
 き、子どもの目が見られな
 かった。戦地であやめた子ど
 もの瞳が焼きついていて」と
 語っておられる人がいました。
 闇の部分にも目を向けなけれ
 ば、闇が襲ってくる。
 そんなトラウマが世代間連
 鎖することもあります。対処
 されなかったものが次の世代
 に受け継がれてしまう。戦争
 が1日でも長く続けばそれだ
 け心に傷を受ける人が増え、
 亡くなった人の家族や知人た
 ちの恨みとか怒りがまたさら

なる火種になっていきます。
 修復がどんなに大変なことか
 想像できるだけに、戦争が一
 日でも早く終わることを心か
 ら願います。

西島 私たちの考えるべきこ
 と、すべきことは何がありま
 すでしょうか。

村本 それぞれの仕方に関心
 を寄せ続けることだと思いま
 す。最近知ってなるほどなど
 関心したのは、若い人たちが
 オンラインゲームで海外の人
 たちとやりとりがあって、ウ
 クライナにもゲーム仲間がい
 て、ネット上で会話したり、
 SNSのフォローしたりして
 る（この頃は翻訳ツールも発

達していますね）。大きな事
 は何もできなくても、関心を
 持って一日も早い平和を願っ
 ていることを表現することも
 できます。ウクライナやロシ
 アの歴史や芸術をあらためて
 学ぶとか、小さな金額でも寄
 付をすることができ。最近

ではクラウドファンディング
 などで支援団体に寄付する方
 法もありますから、なるべく
 なら自分の望む形の支援に活
 かしてくれそうな団体を調べ
 て選ぶといいですね。近くに
 避難者がきたり、ウクライナ
 やロシアから来た人々がい
 らし声かける、できるお手伝
 いをする。周りの人たちと語

り合うことも大事ですね。ウ
 クライナだけでなく、コンゴ、
 イエメン、ミャンマーなど世
 界のいろいろなところで戦争
 が起こっていること、日本が
 移民や外国人に対してこれま
 でどんな態度を取ってきたの
 かなど、視野を広げること
 大事ですね。そして、身近な
 ところから平和を作る努力を
 しましょう。逃げないでちゃ
 んと問題と向き合うこと、話
 し合いで解決すること、自分
 が困ったら助けを求め、困っ
 ている人がいれば声をかける。
 世界は複雑だけど、大切なこ
 とはシンプルなのではないで
 しょうか。

生協のしくみについて

西島 最後に生協について、
 生協は人と人とのつながりを
 大切に行っているのですが、コ
 ロナでなかなか人との接触を
 持てなくなっています。何か
 いいアドバイスなどあります
 でしょうか？

村本 私自身も子育て中に生
 協を始めました。いまは個配
 で玄関に置いてくれるけれど、

その頃は共同購入で、同じマ
 シンションに住んでいる人、子
 育て中の家族と、一緒にお
 しゃべりをしながら品物の仕
 分けをした。あのシステムは
 すごくよかったですね。コロ
 ナで、私たちはZoomなど
 新しい人と人とのつながり方
 を得たけれど、やはりその場
 所に一緒に身体を置いて共に

過ごすことはすごく重要なこ
 とだと思えます。東北のプロ
 ジェクトでとにかく現地に行
 ってみて、直接人々と出会
 うことがどんなに大きな力に
 なるかを学びました。これか
 らも生協には人と人をつなげ
 る存在として期待しています。
西島 今日はありがとうございました。



プロフィール
 村本邦子 Ph.D. (むらもと くにこ)

立命館大学大学院人間科学研究科教授。臨床心理士。
 恵春期外来の精神科クリニックで心理臨床に携わった後、1990年、女性ライフサイクル研究所を設立、2014年3月まで所長を
 務める（現在は顧問）。2001年4月より立命館大学教授。2002年、特定非営利活動法人FLO安心とつながりのコミュニティフ
 ォーラムを設立、代表理事。
 『暴力被害と女性 理解・脱出・回復』（昭和堂）、『援助者のための女性学入門』（三学出版）、『強迫の対人援助学 東日本大震災と
 復興の物語』（共編著、晃洋書房）、『周辺からの記憶 三・一一の証人となった十年』（国書刊行会）、『災厄を生きる一物語と土地
 の力 東日本大震災からコロナまで』（編著、国書刊行会）ほか著書多数。

写真撮影：百塚 猛